

<随想>二枚の絵：川端茅舎と正覚庵

著者	中嶋 秀子
雑誌名	日本文学誌要
巻	28
ページ	74-76
発行年	1983-07-25
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019365

二枚の絵

——川端茅舎と正覚庵——

正覚庵じやうがくあんのある東福寺は洛南に位置する臨済宗の寺で、京都五山のひとつに教えられる格式高い大寺である。塔頭は二五寺もあるというので、茅舎の愛した正覚庵は、東福寺に最も近いところにある。茅舎はここに滞在中は、裏庭伝いに近道を通して、東福寺の三門に登り、楼上の仏像の写生に熱中したということである。

一般には、東福寺は通天寺、通天橋のある寺として知られる。通天橋とは、東福寺の仏殿と開山堂をつなぐ鞆橋であり、洗玉澗と紅葉谷と呼ぶ二つの山間をよぎる流れの上に懸けられたものである。

洗玉澗・紅葉谷と呼ばれるならかな起伏の苔むした地には、ほど良い間隔で楓が生えており、秋には様々な色に紅葉し紅葉の名所として名を馳せている。紅葉ならぬ若楓の頃の眺めも相当なものであり、臨済という厳しい戒律の故か、訪れる人が少ないし、広大な自然と建造物の中で、そのわずかな人々もささく見えるほどで、新緑の頃は、訪れるのに最も適しているといえよう。

前回で抜いた「時雨二四句」の中に

かぐはしや時雨すぎたる齒朶の谷

茅舎

という句があったが、これは通天橋で作ったものであろう。時雨な

中嶋 秀子

らずも晩春から初夏にかけての草木の香りは旅人の心を慰めて呉れる。正覚庵の朴の木も、丁度若葉の時を迎えていた。朴の厚葉をこよなく愛した茅舎を偲んで、正覚庵では二代目の朴の木を丹波から移植したという。老僧平住温洲師ひらふみ じんしゅうは、八七歳の高齡にもかかわらず、きわめて健康で、顔色も良く六〇歳そこそこに見えない若々しさである。老僧が若い時から酒好きだったことは茅舎の

僧酔うて友の頭撫づる月の縁

茅舎

和尚また徳利さげくる月の庭

〃

時雨るゝや又きこしめす般若湯

〃

酒買ひに韋駄天走り時雨沙彌

〃

等の句でも明らかである。現在も晩酌を愉しむという老師は、明朗瀟灑な人物である。少年の頃より小僧として厳しい修業に耐えて来た人物だが、底抜けに明るいのは、その体験を充分に昇華しきった故であろうか。その明るさは、令息の現住職平住法洲氏に受継がれ、からりとした父子二代の僧侶とその周辺からは寺独特の陰湿さを微塵も感じることが出来なかった。

私の訪問する前日、

大機和尚へと／＼餅を搗きなさる

茅舎

のモデルである大機院の住職大機氏がほぼ温州氏と同齢ということだが、元氣に一人で正覚庵を訪ねて来られ、温州老師と歓談して帰られたということだ。法洲氏は、茅舎が正覚庵に来るようになって間もなく生れたので、茅舎の記憶は全くないようだ。今では茅舎と面識のあるのは、温州老師・大機老師、そして、

囀りや拳固くひたき侍者恵信

茅舎

侍者恵信糞土の如く昼寝せり

〃

と読まれた小坊主恵信は、現在正覚庵に近い南明院の住職として健在である。一人早々と逝ってしまったのは、川端茅舎唯一人である。

茅舎は、正覚庵の書院の南東の角部屋という一番眺めも良く明るい八畳の間を使用していた。老師の言葉を借りるとふらりと来てふらりと帰ったということである。滞在中は、よく写生に出かけたという。少年時代水泳の師範代も務めたことのある茅舎はスポーツマンであり、健康であった。達者な脚を生かして、東山周辺をくまなく歩いたようだ。散策の地は東福寺山内は勿論のこと、伏見稻荷・珍皇寺・清閑寺・宝鏡寺・六波羅蜜寺・北野天満宮・詩仙堂・竜安寺と広範囲にわたるものの、茅舎の最も落着ける場所は正覚庵であった。茅舎は正覚庵に仏教の勉強に来たとか修業に来たというのではなく、むしろやすらぎを求めて来たようだ。どの作品にも、正覚庵の人々を特別な眼ざしでなく、隣人として自然に扱っているのである。寺内の人間的な営みが窺える作品が多いのが特色であるが、これは正覚庵の人々が大変のびやかで気楽であり、茅舎の内部にもまたそうした雰囲気にとりつかれるものがあったのだらう。当時は

正覚庵も、もっと小さな構えであったようだが、現在は、昭和四八年に伊丹市から移築した白洲文平氏（白洲正子氏の父）の別邸が、明治中期に移築された旧書院と渡廊下でつながれ、寺というより山荘風或いは離宮風の柔かい雰囲気をかもし出し、建物は山際へと伸びている。だが茅舎が朝晩眺めた中庭は少しも昔と変わっていない。禅寺特有の厳格な石組や刈込ではなく、極く自然のままの樹木が山の斜面をうまく利用して生かされている。本堂は、茅舎の居た部屋の隣室を仏間としていたが、現在は山荘風の奥の白檜の中に、明るく簡素な壇が設けられていた。全ての部屋が日常の生活に使われていたもので、重苦しさより住み易さを考慮されており、本堂も普通の居室を改造したもので明るく暖かい。御本尊を中心に、右に開基御像、左には位牌がびっしり並んでいた。その位牌の林立する中に一きわ大きく立派に見えるのが茅舎のものである。「青露院茅舎居士」の戒名は、茅舎の実兄で日本画の巨匠川端龍子に陰ったものである。この兄龍子と茅舎については後述することにする。

内陣は塵一つない清浄で簡素なものであったが、御本尊の前に供えられた朝餉の御精進は、ままごとのように美しく手のこんだものであった。誰が来なくとも、このように毎朝仏に尽すということは大変なことである。茅舎もこの苦勞を見ていたに違いないが、そのことに触れた俳句も文も残っていないのが残念である。

旧書院とも呼ぶべき玄関に続く一室で、私は平住温州・法洲両氏に面談したが、その建物は日露戦争の時ロシア兵を捕虜として収容していたとかで、敷居にはロシア兵の煙草火による焼跡が点々と残っていた。当時の塔頭は、ロシア兵で一杯であったということだ

が、これも私には初耳であった。その部屋の鴨居には、いかにも「筆の寺」の名にふさわしく、短冊がずらりと並んでいた。その中で、粗末な額に入った一枚の素描画が光っていた。茅舎のスケッチである。一見して相当な写生の力を持った人のものだと思える。私はいくつか、俳人茅舎ではなく、画家川端信一の才能の一端を知らされた。立上って画に対すると、ゴッホやゴーギャンの影響が明らかに伝わってくる。どこかの寺の一遇を写生したものであるが、完全に自分のものになっており、エキゾチックな匂いの漂う褐色の素描画である。茅舎の句の中に

青麦や丘のてっぺんの桔槔

茅舎

ガタ馬車のペラペラ幌や麦の秋

〃

という大正七年の作品があるが、両句には、正覚庵の素描画に相通ずる世界がある。両句ともゴッホの作品からモチーフを得たかと思わせるところがある。さて正覚庵で見出したもう一枚の画は、完成された油彩画であった。これは、茅舎居住の間と伝えられる部屋の鴨居に唯一枚さりげなく掛けられていたのである。　　一つづくー

(一九六二年卒)

国文学会ニュース(2)

☆一九八二年度の卒業式は三月二四日(木)、日本武道館で行われ、日本文学科卒業生二〇七名(一、二部とも)も新たなスタートを切りました。式典終了後、午後一時より本校八四三番教室に於て、国文学会主催の「卒業生を励ます会」が行われ、ビールでの乾杯の後、会長・専任教員の挨拶、卒業生代表の言葉に引続き、卒業証書授与式が行われました。なお、国文学会から記念品としてシャープペンシルを送りました。

☆卒業論文発表会を次の要領で開催しました。四月三〇日(土)午後三時より五三一番教室。発表者と論題は次の通りです。

壇谷雄高論

山田 稔(大学院修士課程一年)

私の卒業論文

西野春雄(文学部教授)

☆原稿募集

四百字詰原稿用紙で、論文(三〇〜三五枚)、随筆(七枚)、書評・新刊紹介(三〜五枚)程度。第二九号の締切は十月一五日。なお、原稿の返送はいたしませんのでコピーをおとりください。